
ディセイバー

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディセイバー

【Nコード】

N1082I

【作者名】

流星

【あらすじ】

7年前、何者かが起こした 事件がきっかけで世界が歪んでしまった。歪みは世界を繋げ様々な現象を引き起こした。世界に平和を取り戻すため一人の少年が立ち上がった。

プロローグ

プロローグ

7年前

「…うが……くうが…」

ん、誰だよ。今、俺は寝てんだ。

「くうが…空牙！ 起きろよ空牙！」

うるさいな……起きるしかないか…

「なんだよ。リヨウ もう朝がきたのか…？」

「朝ならもうとつくにきてるぞ。 って違う違う、そんなことより、ついにわかったぞ！」

わかった？ リヨウのことだ、どうせろくでもないことだろうけど、一応聞いとくか。

「一体なにがわかったんだよ」

「なにがって、忘れたのかよ！？」

忘れたね。遠い昔に。 「ほらあれだよ。あの宝の地図！」

「はいはい、宝の地図ね。それがどうし……って、宝の地図！！ まじかよ！ あれの場所がわかったのか！？」

ろくでもあつたぞ！

「ああ、苦労の末とうとうわかったんだよ。今思えば長かった。始めはな」

「そんなこと、どうでもいいから、はやくその場所に行こうぜ！」

「どうでもいいって……少しくらい俺の苦労を讃えろよ。」

「はいはい、リヨウくん、よくできましたねえ」

お・り・

こ・う・さ・ん」

「やめろ！気持ち悪い もういいから、早く行こうぜ。」
「なんだよ。讚えろって言ったのどっちだよ。ま、いいや。よし、冒険だああー」

俺達は森の中へ走った。

今思えばこの、宝の地図がすべての始まりだった。

正義国家（ジャスティスライン）

「りよう…た…」

なんだ 起こさないでくれ

「う…るさい」

「なっ…うるさいってどういうことよ!!」

待て この声聞いたことあるような… いや間違いなくあるな…

「そう。あくまでも起きないつもりね。ならっ!!」

「いや…まって」

その刹那俺を起こしに来た女 ルナの足から衝撃波が飛ぶ。 マジ

かよ…

「うわっ!!」

その蒼い衝撃波は三日月を描き俺に直撃した。

「いつてえー いきなり攻撃するなよな」

「起きないあなたがわるいんでしょ」

赤い髪に蒼い瞳の少女が言った

さあ さっさと正義国家ジャスティスラインに帰るわよ

「はいはい」

そう今俺達は正義国家の指令で馬車の護衛をしてその帰りだ。

「まったく急にいなくなるんだから」

さっきもいったがこの女の名前はルナ・ルーシェスいろいろ事情があつて知り合つた女だ。わけあつて一緒に旅している。

俺達は、初めから正義国家にいた訳じゃない。7年前理由は、わからないが世界が歪んだ。俺達はその歪みに巻き込まれ跳ばされた。

そこへ跳ばされて倒れているところを正義国家に助けられ少し面倒をみてもらっている。

ゴン!!

「いてっ」

「なにすんだよ!!」

「私の話聞いてなかったでしょ！」

「うつ…」

「ほら、やっぱり聞いてなかったんだ!!」

「…はっ はやくいくぞ」

「あっコラ待て〜」

冗談じゃない!! 捕まったらなにされるかつ!

「ふうー なんとか着いたわね。時間は3時か…じゃあ、私はミッションの報告してくるから先に家帰ってて」

「わっ…わかった…ルナ」

「ん？」

「くっ…わかりました。ルナ様」

「よろしい」

たくっ 確かに聞いてなかったのは悪かったけど、捕まえた瞬間タコ殴りはないだろ。はああー ついてない…

ガチャ

ルナは目の前の女の人に告げる

「ルナ・ルーシェスです。ミッションNO・12365876の完了しました。」

「確認をとります。しばらくお待ちください。」

「…確認しました。ミッションNO・12365876の完了です。報酬をお受け取り下さい」

女の人はお金の入った袋を渡してくる。

「やあ、こんにちは」

「うつ？」

後ろを振り向くと青い髪に透き通った白い瞳をした青年がいた。

「グラウスさん。どうしたんですか？こんなところで？」

今日の前に立っている青年こそ正義国家最高司令官グラウスである。
「いや、ちょっとした用事がありましてね。ルナさんこそミッシェンの完了通知ですか？」

微笑みながらグラウスが話しかける

「はい。馬車の護衛のミッシェンです。」

「すみません。あなた達は正式な正義の騎士^{ジャスティスナイト}ではないというのにミッシェンを押し付けてしまつて。」

「いいんです。こつちは家と食事まで頂いてるのに何もしいないなんて失礼ですし。」

「ありがとうございます。では僕はそろそろ…風邪とかひかないよう気を付けて下さいね。」

「はい。お気遣いありがとうございます。」

グラウスさん本当いい人よね。あつそうだ。今晚の買い物して帰りましょう。

一方涼大は…

涼大は家へ帰る途中丘に寄っていた。

「正義国家か…」

俺はあまり、あそこが好きじゃない…あそこは何か隠してる。なにが…

「おつにいつちゃん？」

「うわっ」

なんだ！？

「お兄ちゃんここでなにしてるの？」

黒い髪に赤い瞳の小柄な少女が言った、この子はルリ。ルリ・ル

「シェス そうルナの妹だ。」

「今から家帰るとこだがルリこそ何してるんだ？」

「ルリはねえお兄ちゃんと一緒に帰りたくて探してたのお
どついうこつちゃ

家で待ってるつったのに、一緒に帰りたくて探しにきた？ よくわ
からん

「そうか。じゃあ一緒に帰ろうか」

「うん はやくかえろおお お兄ちゃん？」

「おーい りよおーたー ルリいー」

「ん？」

ルナ？

「あー ルナちゃんだあ」タッタッタッタッ…

ルリが走ってルナのところへ行く。

「おかえりいールナちゃあーんっ」

ルリがルナに抱きつく

「あはは ただいまルリ」

ルナがルリの手を持ってぐるぐる回転している。 楽しいのか？
あれ

「おい 遊んでないで、はやく帰るぞ。」

「はあーい」

「そうね。そろそろ夜ご飯だしね。」

その頃正義国家では…

「グラウス様 正義の町の住民に反乱の気配があります。」

「反乱？そう？ もしかしてこの前、僕に逆らった愚民がいたから惨殺したのが、ばれちゃったかな？ あはは」

人前で見せる優しい表情とは豹変して恐ろしい笑みを浮かべていた。

「いかがいたしましょう」

「そうだね…僕に逆らうものは排除しようかな こちらから仕掛けるよ。そういえば涼大君に知られるとなにされるかわからないから気付かれないようにね」

「了解しました」

ザクッ！

その瞬間床が血の海になった。

「了解いたしました…ですよね？」

グラウスは不気味な笑みを浮かべた。

「了…解い…たし…ました。」

「ふふふ。それでいいんですよ。では行ってください。」

正義の騎士は2人の騎士に抱えられながら去って行った。

「ふふふふふ ふははははははは… ふふ、正義の町に悲鳴と血が飛び交う…鍵を握っているのは君だ…どう動くディセイバー涼大

…」

グラウスは正義の町を見下ろしながら呟いた。

「これからが楽しみです。ふふふ すべては正義の名のもとに…」

グlaus

「武器の装填完了しました。」

「そうですか。一応あれの準備もしいてください。準備が終わり次第開始してください。」

「了解いたしました。」

「さて、僕も準備しときましょうか。」

そう呟いてグlausは暗闇に消えていった。

「それで、今日お兄ちゃん達はなにしてたのぉ？ ルリを置いて行っちゃうなんてひどい〜」

ルリが晩ご飯のカレーを食べながら言った。

「別にルリを置いていった訳じゃないわよ。ほら、よく眠ってたから。」

「む〜っ」

「それに朝机に貼り紙していっただろ。」

「そうだけど…ルリも…いっしょに…いきたかったもん…。」

やばっ、ルリの奴なんか、泣きそうになってる。

「そうだよな。ごめんね一人にして、次はみんなで行こうね？」

優しくルナがルリの頭を撫でる。

「ほんとぉ…？…ぜったい…ぜったいだよぉ…」

「うん。絶対約束する。」

（もう！涼大はすぐ泣かすんだから。）

（俺は別になかしてなんか…）

ドガン！！！！！！

ジャステイスンティ

その瞬間、正義の町から爆発がおこった。

「なんだ？」

「正義の町からよ…」

「何かあったのか…ルナ！ 行くぞ…！」

「うん。わかった…！」

涼大とルナは正義の町目指して飛び出していった。

「待ってよ！置いてかないでよおー」

ルリも続いて走り出す。

「な…なんなんだ…これは…」

人が…みんなが死んでる。

町は火に包まれていた。

「ぎゃあああ」

短い悲鳴が聞こえ、涼大は悲鳴が、聞こえた先をみた。

「おや？そこにいるのは涼大君じゃないですか。ルナさんとルリさんも」

グラウスは自分の町の人たちを、殺していた。

「グラウス…さん…あなたこんなところでなに…」
ルナが問いかける。

「僕に逆らう愚民たちを排除しているんですよ。」

グラウスは答えた。

「…ざっけな…」

「なんですか？」

「ふざけんな！ この町の人になにをしたって言うんだ。」

「だから、僕に逆らって僕の機嫌を損ねたから」

「逆らった？ 機嫌を損ねた？ たとえ… たとえ逆らったとしても… お前の気分で人を殺していいわけないだろがぁぁー！」

涼大は腰にある剣を抜き、グラウスに斬りかかった。

「ほう… 僕に挑んできますか… いいでしょう。」

グラウスも刀を抜き涼大の剣を受け止めた。

「みんなさっきまで笑ってた… それをお前は！」

「笑ってた？ それじゃ困るんですよ。」

「僕が望むのは悲しみ、絶望、笑うなどという、感情必要ないんですよ。」

「貴様の勝手な感情をみんなに押し付けるなぁぁー」

その瞬間斬り合っていた刀がグラウスの頬をかすった。

「ん？」

グラウスは後方へ跳んだ。「血…」

その時グラウスの表情が怒りに歪んだ。

「貴様… よくも僕の顔に傷を！」

グラウスが斬りかかる

「みんな僕の言うことを聞けばいいんだよ！」

「僕に逆らうものは死ね！ 消えろ！」

「ぐっ」

涼大は体を次々と斬られる。

「涼大！」

ルナがグラウスに飛びかかった。

「女がでしゃばるんじゃないええ！！」

グラウスはルナの体を斬った。

「きゃああ」

ルナは腕を抑え倒れた。

「ルナ！」

「余所見する余裕あんのかあ！」

グラウスが涼大の剣を弾き、肩を斬りつけた。

「ぐああああ」

涼大がその場に倒れる。

「死ね。ディセイバー涼大！」

「やめて…やめてよう…これ以上お兄ちゃんを傷つけないでよう」

ルリが泣いている。またあいつを泣かせてしまったな。世界を

救う…俺なんかじゃ無理だったのかな。ごめん…約束を果たせなくて。ごめん。レイ…

グラウスの刀が涼大の心臓目掛けて降り下ろされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082i/>

ディセイバー

2010年10月11日19時47分発行